

○ おし葉製作法の改良 (金井弘夫) Hiroo KANAI: Improved methods of making dried specimens

長期にわたる旅行の際、どうしても簡便な植物の乾燥法が必要となる。新聞紙にはさんだものを液浸にしてポリ袋へ保存する方法も外国での通関や検査のトラブルとなることがある。1960年のシッキム採集では富樫誠氏考案のジュラルミン「すだれ」(標本をはさむ新聞紙に接する面が平たくできている)と東大製のプレスとが偶然よく組み合わさせてよい結果を得た。これを元にして国内でも乾燥紙交換の手数を省くことを目的として工夫してみた。まず新聞紙にはさんだ標本と「すだれ」を交互に重ねて紐でしばって、電熱乾燥器の中に置けば、テンナンショウのようなものでも放置するだけで完全に乾燥する。植物が乾くにつれて紐がゆるむ点は、紐の代りに自転車などの荷台で使うゴムバンドを使えばよい。紙を乾かす位の温度ならゴムに影響はない。

太い茎のかげの部分に圧力がかかる、シワになる欠点は、モルトプレンシート(薬ビンの中などにあるスポンジ)を新聞紙の1頁大に切って、「すだれ」標本、モルトプレン、標本、「すだれ」の順序に重ねると解決する。このスポンジの使用はきわめて有効である。このようにしたものは野外での火力乾燥には、ゴムバンドをのぞけば有効と思う。特に自動車を使う採集の場合、こうやってセットしたものを屋根にくくりつけて走り、或は排気ガスを通りすように工作すれば便利だろう。

熱をかける為にロウ質がとけてしまったり変色したりするのが欠点とされているので、加熱せずに乾燥する方法も考慮中である。除湿機を使って作った乾燥室をポリエチレンのダクトで上記の通りセットしたものに通気したところ、かなり時間がかかるが一応の成功をみた。ただし送風量、空気流れ、温度調節などの点に改良の余地がまだ多い。加熱乾燥だと「すだれ」を使ったものでも周辺部はよく緑色が残るのに中央部が変色することが多く、これは通気が悪いためにいわば「ゆだった」状態になるためと思われる所以強制的に通気する方法がよいのではないかと思う。

(東大理・植)

□ Lewis, K. R. & B. John: **Chromosome marker** pp. 489 J. & A. Churchill Ltd., London (1963) pp. 489 ひねった題の本であるが、ねらいは染色体を生物の中心と見、且つ鍼であり手段とみて細胞分裂、遺伝、発生、進化の四つの面に夫々関連させながら総説を試みたもの。ランプブラッシュ構造が述べられているが核型分析は一言もでていない点で片寄っているといふ人もあろうが、それだけに新らしいことが多く我々が見落している点で得るところが多い本である。例にあげた動植物の分類表があるのはまことに親切。65s. (前川文夫)

□ 奥一: **多肉植物ハンドブック** 金園社(東京) pp. 184+85 小型版(1963) 昭和35年でたサボテンハンドブックの姉妹篇。この頃ブームとなったのに応じたもので、一般的ではあるが、属を網羅し、写真のある点、日本で栽培された種類の全部のリストに学名と園芸名とを、相当な程度に整理してある点で大変参考になる。著者は胸を患われて昨夏に他界されたのは残念であって、哀悼の意を表する。¥ 280. (前川文夫)